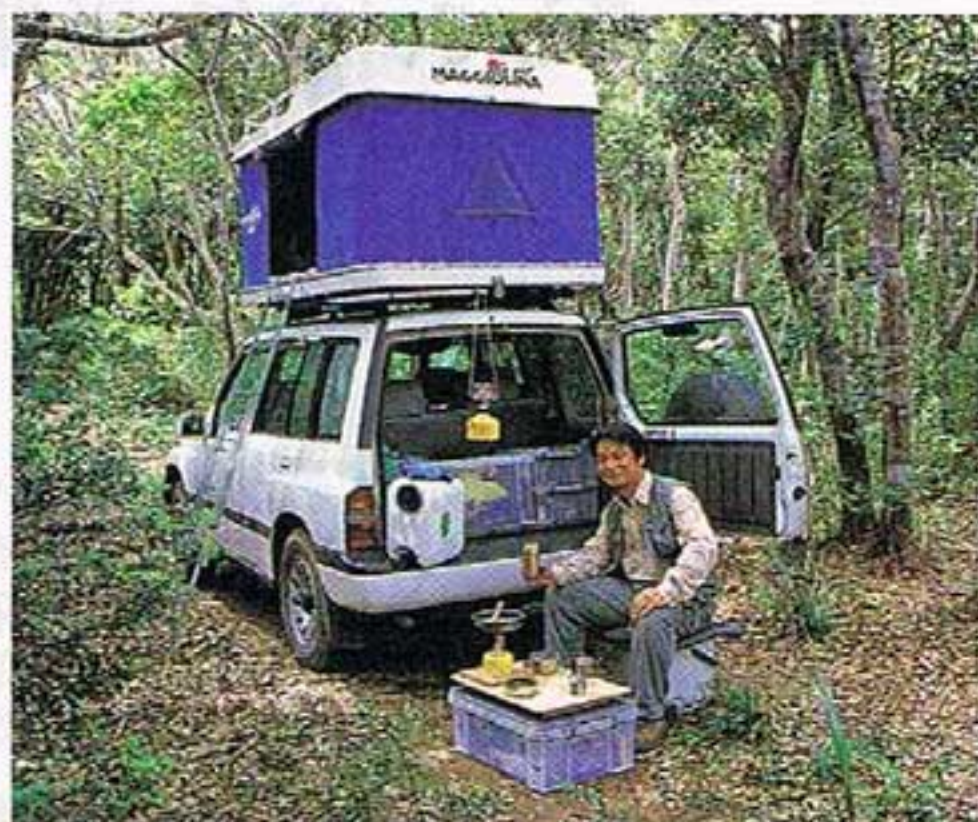


↓「学生的时候はよく仲間と手の込んだ料理をしたのですが、今は簡単なものになりました」と語る。このほか小さな保護色のテントに隠れて撮影することもある。



100年に一度あるか否かの現場に立ち会えたのは、本当に恵まれていたと思います。それ以後、昆虫学教室ではヤンバルテナガコガネを飼育して研究がはじまり、その一部始終を写真に撮ることができたのですから。でも、やはり僕の写真家活動を決定付けたのは、最初に見たときの驚きですね。青銅色に輝き長い前脚を持つ姿、カブトムシの1・5倍はあろうかという大きさ。ヤンバルテナガコガネは日本最大であり、もつとも亜熱帯を感じさせる甲虫です。僕は思いました。こんな甲虫を、

人目に触れさせずに隠し続けたやんばるの森はどんなところなんだろうかと」

以来、大学入学時から続けていた湊のやんばる通いは変わっていく。まずそれまで数人の仲間と連れ立っていたのをやめ、単独で森に入るようになった。さらには設営・撤収が面倒だからとテントもやめ、車載型のポップアップテントを購入。ほかの作業をいっさい省いて、森を見つめることに集中していったのだ。その結果、湊は次々にやんばるに棲息する珍しい生物の撮影に成功した。自然環境にいるヤンバルテナガコガネも見事に撮影した。そうしたやんばるの自然を撮った湊の写真は、やがて出版社の目に留まるようになり、やんばるの写真集も仕上げた。だが、彼はまだまだやんばるの撮影をやめない。

「じつは、自分自身で見つけ出して野生状態のヤンバルテナガコガネを撮影したことは、まだいちどもないんです。あそこにいたよ、と研究者や地

元の人の情報を元に探し当てたものだけなんです。それも3年にいちど見つかるか見つからないか。ヤンバルテナガコガネの数が少ないからだともいえるんですが、まだまだ僕自身がやんばるをわかっているからでもあるんですね。それほどやんばるの自然は奥深いんですよ。まだまだ撮りきれません。しかし心配事もありましてね。近年やんばるの森の開発がひどいんです。ヤンバルテナガコガネやヤンバルクイナ、ノグチゲラなど、世界中どこを探してもやんばるにしか棲んでいない生物が、どんどん生息地を狭められてしまっています。今、昔ながらのやんばるの森が残っているのは米軍の演習場になっているところだけです。皮肉なものですよ。ジャングル戦の演習をしたがために米軍が使っている森にしか、元の自然が残っていないなんて。僕の写真を見てくださる方々には、日本には温帯の自然だけではなく、貴重な亜熱帯の自然もあるのだと知ってほしいんです。そこは珍しい生物が棲息する原色の世界。そのために、色鮮やかなプリントを追求しているんです」

湊の写真展は盛況だった。彼は会期中、毎日会場に詰めて来訪者の質問に丁寧に答えていた。そして9日間の会期を終えると、再びやんばるの森に帰っていった。